

小特集

カルトグラフィー
可能性の空間の地図制作

—— 概念の歴史学と実践の社会学の対話 ——

岡澤 康 浩*

2022年7月24日に人文研アカデミーの一環として、「実践としての科学的認識：『客観性』『ラボラトリー・ライフ』を読む」が開催された¹⁾。この合同合評会の開催は、ブリュノ・ラトゥールとスティーヴ・ウールガーによる『ラボラトリー・ライフ』（原著1979年、第二版1986年）と、ロレイン・ダストンとピーター・ギャリソンによる『客観性』（原著2007年）という科学論の重要著作が、前年のほぼ同時期に邦訳出版され、さらに両著作の翻訳に人文研河村班の班員が関わっていたという偶然的事情によるところが大きい²⁾。だが同時に、人類学者・社会学者によって書かれた『ラボラトリー・ライフ』と、歴史学者によって書かれた『客観性』とを並置し、両者の接続を図ったこの合評会は、知識生産に関心を寄せる社会学者、人類学者、歴史学者などが分野を超えて集える場所を提供するという河村班の目的にかなうものでもあった³⁾。

こうした異なる学問的背景をもつ参加者たちをつなぎ止めうるポイントとして、河村班では特に「実践」が注目されていた。イベント用のフライヤーにも、これに呼応するような以下の文言が記されていた。

実践へと帰れ。『ラボラトリー・ライフ』を嚆矢とする実験室研究は、「真理」、「実在」、「客観性」といった高度に哲学的な概念の作動を、実験や観測といった科学者たちの具体的な実践のなかで検討するという方向性を切り開いた。それから約30年後、『客観性』は、科学者たちの実践を可能にし、その実践と共に生み出される概念の歴史的生成をも記述する道を指し示す。実践の解明という実験室研究以降の課題と、概念の歴史的探究というフーコー以降の課題。この二つの作業の関係性を明確化し、私たちが生きる認識論を明ら

*おかざわ やすひろ 京都大学人文科学研究所 助教

かにするために、私たちは『客観性』という到達点から『ラボラトリー・ライフ』の可能性の中心へと遡らねばならない。

ここで述べられているような『ラボラトリー・ライフ』と『客観性』とがまっすぐにつながっているという歴史観は、必ずしもすべてのひとが同意できるものではないかもしれない。『ラボラトリー・ライフ』に代表されるような「ローカル」な文脈に注目する社会学・人類学的実験室研究と、『客観性』のようなかなり広範な時代と地域を扱いながら概念の変遷を明らかにする歴史研究とでは、行われている作業がまったく異なるという見方も成立するからだ。

かつて、『ラボラトリー・ライフ』やそれに呼応する著作は、社会学者・人類学者・哲学者・歴史家とが分野の違いを超えて議論を交わし、協働できる学際的な場所としての科学論を切り開いた。そこで展開された議論の影響は、単に科学と呼ばれる限定された領域に関心をもつ研究者だけにとどまらなかった。科学論者として出発したラトゥールの議論が、おそらく科学にはとりたてて関心を持たない多くの読者にも届き、「批判」のあり方自体を更新するものとして理解されたのも、そうした科学論のかつての活力を例証しているだろう⁴⁾。一方で、科学論において、現在でも生産的な協働関係が維持できているのかについては、しばしば否定的な意見が表明されている⁵⁾。異なる学問的背景をもつ者同士が対話を続けることには相応の負担がかかるのだから、学際的な対話を生産的なものとして維持しつづけられることのほうが、多くの研究者の献身と幸運とに依存する例外的な事態だったのかもしれない。

それゆえ、毎日を忙しく過ごす私たちは、負担となりかねない他分野との対話を打ち切ってしまうという誘惑にしばしばさらされることになる。ローカル／グローバル、ミクロ／マクロ、共時的／通時的といった区別など、社会学者・人類学者・歴史学者が自らのアプローチを説明しようとして繰り返す言葉は、たとえそう意図しなくとも、こうした分断を強化する誘惑へとからめとられてしまう危険がある。もし、社会学・人類学と歴史学の間に根本的な分断があるのであれば、私たちは互いの仕事を参照せずとも仕事を進めることができるのだし、そうした分断は分業の名の下に正当化されるかもしれないからだ。

実際、学際的科学論の優れた成果として読める『客観性』においてさえも、ミスリーディングな記述が散見される⁶⁾。ダストンとギャリソンは、近年の科学史における極端に狭い視野の事例研究の流行に対する懸念を示す。ある特定の実験室の秩序を、直近の社会・経済・文化的な要因によって直ちに説明しつくそうとする拙速を戒めることも、ますます歴史学化する科学史から哲学的ともいえる問題意識が薄らいでいくことへの危機感も、それ自体としては妥当なものだろう。しかし、こうした懸念が「ローカル／グローバル」といった概念対のもとで語られ、「ミクロ」な歴史記述に対してより広範な時代・地域をあつかう歴史が対立的に置かれるとき、そこで導入される区別は『ラボラトリー・ライフ』と『客観性』を繋ぐ回路を遮断する

議論に容易に流用されてしまうだろう。

本特集が試みるのは、こうした分断に抵抗し、歴史学・社会学・人類学・哲学を横断しうる回路の一つのあり方を提案することである。

前田論稿は、2022年7月の『客観性』『ラボラトリー・ライフ』合同合評会に提出されたものを微修正して再録したものである。この論稿では、概念の歴史の変遷を書くという歴史学的作業と、「ローカル」な場所で行われる実践の分析を行うという社会学的・人類学的作業の間にひかれる分断線が問い直され、両者を再架橋することが試みられる。そして、概念の歴史としての『客観性』の歴史記述を、社会学者・エスノメソドロジストの視点から実践の記述として読み直すことで、実践における概念の分析という作業を、社会学者・人類学者と歴史家が共有していることを確認する。

前田論稿を受けて、この特集用に新たに書かれた河村論稿は、概念の歴史と実践の分析との間で分断が生じた事例として、哲学者のイアン・ハッキングと社会学者・エスノメソドロジストのマイケル・リンチとの論争を取り上げる。ダストン & ギャリソンへのシンパシーを隠さず、フーコーを継承する哲学者として自らも歴史記述に手を染めるハッキングに対して、ハッキングの書く歴史とは実践を見ないたんなる概念史に過ぎないと、リンチは挑発する。リンチの批判に答えるハッキングは、概念の歴史を扱ったフーコーと実践の分析を遂行したゴフマンの間に自らを位置づけることで両者を統合することの必要性を主張する。しかし、ハッキングの答えは、彼の意図に反して、概念の歴史と実践の分析とが別個に存在するという印象を与え、両者の分断をむしろ強化してしまう恐れがある。これに対して河村論稿は、概念の歴史と実践の分析とを別々の作業ではなくむしろ同一の作業としてとらえ、フーコーの中にゴフマンを読み、ゴフマンの中にフーコーを読むことを提案する。

こうした概念の歴史と実践の分析を結びつけようとする両論稿が、共にイアン・ハッキングの歴史的存在論を重要な参照点として挙げているのは偶然ではないだろう。歴史的存在論の名の下に、ハッキングは私たちが生きる可能性の空間とその変容を描き出すという方向性を打ち出していた⁷⁾。そして、本特集の両論稿が示すのは、概念の歴史と実践の分析が、可能性の空間を描くという課題を共有しているという見通しである。相互行為の現場において実際に観察される現象、すなわち「現実的なもの」は、つねに実現することのなかった「可能なもの」との対比をともなって現れる。それゆえ、実践の分析は、常に現実的なものと可能なものの両者を含めて分析しなければならない。同時に、概念の歴史が示すのは、行為を統制する概念の変化は、そもそも何が可能で何が可能でないのかという可能性の空間自体を変形させるという事態である。新しい概念は、新しい行為の可能性を切り開く。しかしそれと同時に、新しい概念は、新しい形での不作為や怠慢、「存在することも可能だったけれど現実には存在しなかった行為」をつくり出す。十九世紀に科学の世界を席卷した機械的客観性の概念のもとで、科学者

が自分自身の視線や感覚を科学的対象の理解を歪めうる主観性の源泉として発見するようになるという事態について『客観性』は描いていた。こうして現れた新たな概念のもとで、科学者が自己を減し主観を排除するという新たな実践が可能になる。それは同時に、そうした自己規律が不在である状態を、果たすべき義務の不履行として新たに発見することも可能にする。そこにおいて、自らの学識と観察眼を頼りにする科学者の仕事は、主観性の適切な制御という選択が「可能」であるのにそれを「しない」ものとして現れるようになるだろう。

もし、現実的なものが、可能なものという大海に浮かぶ島々ならば、現実的なものを描きだす作業はそれを取り囲む海の広さと深さを同時に描きださなければならないだろう。それゆえ、ある特定の場所と特定の時間の中での実践を描き出すという作業は、実際に行われたことだけを描くのではなく、行われなかったけれども行うことが可能であったことをも同時に記述しなければならない。つまり、実践の記述は、そうした実践を可能とする可能性の空間の地図制作を必要とする。

その空間は歴史をもつものだから、この地図制作には、時間と共に変わりゆく空間にあわせて、島とそれを取り囲む海の形を絶えず描き直すという作業も含まれるだろう。そうして作りだされる地図は、新たな島々が海面から現れ、あるいはかつて島だったものがゆるやかに海面下に沈んでしまう姿をも書きとめることができるだろう。

実践を描くことは可能性の空間を描くことであり、またそうした空間の歴史の変容を描くことでもある。こうした発想はかなり荒削りな形ではあるものの、『ラボラトリー・ライフ』においても素描されていたと言えるかもしれない。ラトゥールとウールガーは川端康成の『名人』で描かれた囲碁の盤面を紙上へと転写することで、棋士が打つそれぞれの手が、それ以前の手の積み重ねによって組み上げられた石の配置、そのゲームのたどってきた歴史に条件づけられていることを印象的に描き出していた⁸⁾。そこで、ある特定の時点で打たれる指し手を分析することとは、実際に選ばれた手を、ある特定の歴史的条件の下で可能な他の指し手と比較することである。個々の指し手の分析はやがて、いくつもの手が積み重なることでつくられるゲームの歴史を明らかにする。翻って、そうした歴史的条件の解明は、次に打たれる手の分析を可能にするだろう。

名人の放つ白130という手の分析には、その指し手がそもそも可能となる盤面上の歴史的条件の把握と、実際に打たれた手と、打つことも可能であったけれど打たれなかった他の手との比較とが含まれている。川端の『名人』はさらに、一局の内で織り上げられる歴史を、碁という営み自体の歴史と重ね合わせていた。碁の歴史を通して、個々の勝負を統制するルールもエートスも変化しうる。対戦相手の七段が放つ黒121という手に見せる名人の怒りは、新しく導入された「封じ手」制度と、そこで可能になった新しい時間稼ぎの戦略といった、棋士たちが経験していた行為可能性の変容を踏まえることで、はじめて理解可能になる。そして、名人

に勝利したはずの七段は、碁盤の前で青ざめ、庭で一人涙を流す。それは、ある特殊な存在へと開かれていた可能性が目の前で急速に閉ざされていくのを、彼が直観的に理解していたからだろう。碁を打つことが芸道の一つであり生き方でもあったような「名人」は消え去り、その後に来る者たちは知的な競技としての碁において真剣勝負を戦う、別種のエートスに身を捧げる存在者となっていく。可能性の空間を描くという作業には、それまで存在しなかった存在や行為の可能性が生み出されると同時に、別様の存在可能性が消滅していく、そうしたダイナミックな過程をとらえることが含まれている。そこでは個々の指し手の分析と、その指し手が存立する可能性の空間を描く作業は、一つに融け合っている。

もちろん、私たちが生きる世界と碁のゲームとは大きく違っている。私たちは、石がまだ何もおかれてはいないまっさらな「始まり」などをもつことはない。むしろ、わたしたちは、いくつもの歴史的條件が生起してしまっているゲームへと、つねにすでに投げ込まれている。そして、碁のゲームと違って、私たちが生きる世界においては、ゲームのルールは明示的に示されるとは限らないのだし、ゲームの最中にルールが変化してしまうことさえあるだろう。それでも、あるローカルな実践を、そうした実践を可能にすると同時に制約する可能性の条件としての概念や物質の諸配置や、実践の積み重ねが作り出す歴史から切り離さずに分析できるはずだという『ラボラトリー・ライフ』の示した直観を、私たちはより洗練された形で『客観性』の中にも読み継ぐことができるだろう。

本特集は、可能性の空間の地図を描くという観点から、『客観性』と『ラボラトリー・ライフ』を、フーコーとゴフマンを、概念の歴史と実践の分析とをむすびつける。私たちが現実として生きる行為と存在を、それを可能にする諸条件とともに解明していく作業、それをもし「批判」と呼ぶことができるならば、可能性の空間の地図制作を掲げる本特集は、批判の一つのあり方を提案するものだともいえるだろう。

注

- 1) 評者は歴史学から金凡性さん、人類学から鈴木舞さん、社会学から前田泰樹さんに務めていただいた。また、イベントの配信は、柴田秀樹さんに務めていただいた。
- 2) 河村班の正式名称は「科学的知識の共同性を支えるメディア実践に関する学際的研究」班。班員のうち森下翔さんが『ラボラトリー・ライフ』の、瀬戸口明久さんと岡澤が『客観性』の翻訳プロジェクトに参加していた。書誌は以下の通り。Bruno Latour and Steve Woolgar. 1986. *Laboratory Life: The Construction of Scientific Facts*. Second Edition. Princeton, NJ: Princeton University Press. (=2021, 立石裕二・森下翔監訳, 金信行・猪口智広・小川湧司・水上拓哉・吉田航太訳『ラボラトリー・ライフ：科学的事実の構築』ナカニシヤ出版)。Lorraine Daston and Peter Galison. 2007. *Objectivity*. New York: Zone Books (=2021, 瀬戸口明久・岡澤康浩・坂

本邦暢・有賀暢迪訳『客観性』名古屋大学出版会)。

- 3) 訳者代表である瀬戸口さんのものを含む科学史家からの反応としては、『生物学史研究』102号(2023年)で『客観性』特集が生まれ、5名の科学史家による書評が掲載されている。他の訳者のうち、有賀さんのものは、次の文献。有賀暢迪・中尾央, 2010, 「認識論的徳としての客観性: イメージから見える科学の姿」, 『科学哲学科学史研究』4号, 127-136頁。岡澤による書評はオンライン書評誌 *Tokyo Academic Review of Books* の29号(2021)に掲載されている。
- 4) Bruno Latour. 2004. "Why Has Critique Run out of Steam? From Matters of Fact to Matters of Concern." *Critical Inquiry* 30 (2): 225-48 (=2020, 伊藤嘉高訳「批判はなぜ力を失ったのか——〈厳然たる事実〉から〈議論を呼ぶ事実〉へ」『エクリヲ』12号, 198-231頁)。
- 5) 科学史家からこの傾向に懸念を表明したものとして、たとえばダストンの論文がある。ダストンによれば、科学論と科学史が徐々に交流を失ったのは1990年代半ばであり、それ以降、科学史はより歴史学に近づいていき、その過程で認識論や存在論に関わるような哲学的問題への関心も弱まっていったとされる。Lorraine Daston. 2009. "Science Studies and the History of Science." *Critical Inquiry* 35 (4): 811, n30.
- 6) 『客観性』邦訳37-39頁。
- 7) Ian Hacking. 2002. "Historical Ontology." In *Historical Ontology*, 1-26. Cambridge, MA: Harvard University Press (=2012, 出口康夫・大西琢朗・渡辺一弘訳)「歴史的存在論」『知の歴史学』岩波書店)。
- 8) 『ラボラトリー・ライフ』邦訳241-244頁。